

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

鼻の助太郎

いにしへの超ラッキー男



伝説 鼻の助太郎
いにしへの超ラッキー男

紀行 鼻の助太郎と丹波篠山
・助太郎話
・助太郎屋敷跡
・丹波焼と和田寺
・篠山の町並みと篠山城
・雲部車塚

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

鼻の助太郎

いにしへの超ラッキー男

昔、丹波篠山（たんばささやま）の真南条（まなんじょう）村に、助太郎（すけたろう）という働き者の木挽（こび）きがありました。木挽きですから、毎日山で木を切るのが仕事でした。

ある日山へ行ってから、なたを忘れてきたことに気がつきました。なたを取りに家へもどってみると、およめさんがぼたもちを作って食べています。助太郎がこっそりのぞいているのを知らず、「残りはまたあとで食べよう」と、おし入れにしまいました。

その日の夕ご飯のとき、およめさんはぼたもちをかくしたまま、出してくれません。そこで助太郎は、わざと鼻をひくひくさせながらおし入れに近づき、「なんだかうまそうなおいがするぞ」と言って、ぼたもちを取り出しました。

びっくりするおよめさんに、助太郎は、「今日、山で天狗（てんぐ）に、何でもかぎ当てる術を教えてもらうたんや」と言いました。もちろんうそに決まっていますが、およめさんは、すっかり信じこんで、近所の人たちにも話してしまいました。

しばらくして、となり村の長者の家から使いが来ました。

「長者の娘さんの、金のかんざしと銀のくしがのうなったんじゃ。助太郎さんの鼻でかぎあててもらえんやろうか。」

さあえらいことになったと、助太郎は思いました。どうしたらよいかと思案していると、夜になって、長者の家ではたらく女の人がやってきました。

「どうしたんじゃ。」

「はあ、私はかんざしとくしがほしなって、盗んでしまいましたんや。蔵の北側にある石の下にかくしてあります。どうか私のことは、言わんといてください。」

女の人は泣きながらたのみました。

助太郎は、「人のものを盗むのは悪いこっちゃ。そやけど、正直に言うたんやから、あんたのことは言わんとく」と答えました。

あくる日、助太郎は長者の家へ行って、たちまちかんざしとくしを見つけましたので、長者はたいへん喜んで、たくさんのお礼をくれました。

助太郎のうわさは、とうとう都まで伝わって、殿様（とのさま）の耳にも入りました。ある日、助太郎の所へ殿様の使いがやってきました。

「家宝の刀がなくなって困っております。何とかさがしてはもらえませんか。」

助太郎は弱りました。けれども殿様のたのみではことわるわけにはゆきません。仕方なくしたくをして、出かけてゆきましたが、どうすればよいかわかりません。都に上るとちゅうの小さなお宮さんで、助太郎は手を合わせて、「どうかお助けください」と一心にいのりました。

助太郎がお宮さんのかげでひと休みしていると、三人の侍が通りかかりました。侍たちが、何かひそひそと話しているのを、助太郎が思わず聞き耳をたててみると、「刀は、屋敷の梨(なし)の木の根本に埋めてある。いくら助太郎でもわかるまい」という声が聞こえてきます。

助太郎は大喜びです。思わずお宮さんにお礼を言って、都に向かいました。

殿様のお屋敷についた助太郎が、たちまち刀をさがしあてたのはもちろんです。殿様は大喜びして、たくさんのおほうびをくれました。

こうして真南条に帰った助太郎は、大きな屋敷を建てて暮らしたということです。その屋敷あとは、今でも真南条の村に残っています。

紀行「鼻の助太郎と丹波篠山」

助太郎話

兵庫の伝説の中でも、助太郎（すけたろう）はちょっと変わった印象の話である。いろいろな本に取り上げられているが、内容が昔話的で、土地に根ざした伝説らしい泥臭さがない。どの土地にもありそうな話なのである。登場人物が人のよい木挽きや長者様、殿様など、昔話の定番だし、助太郎以外はどこの人なのかははっきりしないことも昔話的である。どこから持ち込まれた話が、定着したのではないかとも思う。

ところが一方で、舞台になった真南条（まなんじょう）の村には、ちゃんと助太郎の屋敷跡が残されている。これはどういうことなのだろうか。

あるいはそれだけ、助太郎の人物像が愛されたからかもしれない。「鼻かぎの術」を簡単に信じ込んでしまう素直なお嫁さんもそうであるが、かんざしを盗んだ女の人を、諭しながらも守ってやるなど、話の中でだれも傷ついたりだまされたりしていない。助太郎の人のよさだけで、幸運は向こうから転がり込んでくるのだ。山里の素朴な人情にあふれた物語が、篠山（ささやま）の人たちの心に共鳴した結果が、助太郎屋敷をつくりだすことになったのではないだろうか。

この物語には屋敷跡以外に訪ねる場所がない。けれども、篠山に残された歴史をめぐれば、物語を生んだ風土がわかるかもしれない。

助太郎屋敷跡

その助太郎屋敷跡は、真南条下にある。国道372号線を北東へ向かい、舞鶴道（まいづるどう）の高架をくぐったすぐ先の三叉路（さんさろ）を村の中へ進むと、100mほど先の田んぼの中に、1mほどの高さがある四角い壇が見える。その一方は浅い池になっていて、壇の上には小さな祠（ほこら）と灯籠（とうろう）が置かれている。

一見すると小型の古墳のようで、壇の裾にある、「助太郎屋敷跡」という古びた木の立て札がなければ間違っただけで間違いそうである。壇の面積は10m四方くらいだろうか。大きなお屋敷が建っていたような面積とはとても言えないが、なぜこんな狭い場所が「屋敷跡」と言われるようになったのか、明らかに人工的に整えられたこの壇は、そもそも何だったのか、結局わからずじまいである。



助太郎屋敷跡の遠景



道から見た屋敷跡



屋敷跡の祠

丹波焼と和田寺

真南条の村から、武庫川（むこがわ）の流れを渡って西へ向かうと、今田町（こんだちょう）の上小野原（かみおのはら）の交差点がある。このあたりから南北にのびる谷筋が、丹波焼（たんばやき）のふるさと四斗谷（しとだに）から立杭（たちくい）の谷である。南へ道をたどると、両側には窯元が軒を連ね、焼物を求める観光客の姿も多い。



立杭の里 北の山から



山中で見つけた石仏

丹波焼は、800年ほど前の鎌倉時代から生産が始まった。壺（つぼ）、甕（かめ）、すり鉢など、庶民の日用器を中心に生産を続け、近世には江戸の町でも大量の丹波焼すり鉢が売られていたという。焼き締めや、赤土部、灰釉（かいゆう）など、素朴な陶器は、時代を超えて人々に愛されている。



和田寺遠景



和田寺



本堂前の石仏

この立杭の北端にあるのが、和田寺（わでんじ）である。寺伝では7世紀に法道仙人（ほうどうせんじん）が開いたとされ、最盛期には数十の伽藍（がらん）が建ち並ぶ大寺であったそうだが、幾度かの兵火に焼かれ、現在の位置に移ったという。伽藍こそ新しいが、静かな参道や境内は心を落ち着かせてくれる。

篠山の町並みと篠山城



南の外堀からの眺め

国史跡篠山城は、慶長14（1609）年に徳川氏によって築城された。大坂城にたてこもる豊臣氏の周辺を押さえるため、数多くの大名に号令して、わずか半年で築城されたという。

現在、篠山城には、往時の建物は残されていない。明治維新でほとんどの建造物が取り壊され、残された大書院も失火によって焼失。現在の大書院は2000年に再建されたものである。城の北側は駐車場などが整備されて、便利ではあるが城の景観は少し損なわれているかもしれない。



内堀と石垣



城跡から見た町並み



石垣に残る記号



石垣に残る記号

城の風情を味わうには、むしろ外堀をめぐる西側の道を通って、城の南へ回ったほうが良いだろう。堀の西には、「お徒士町武家屋敷群（おかちまちぶげやしきぐん）」が残り、幕末の城下の雰囲気は今も残している。通りには安間家史料館（あんまけしりょうかん）もあり、江戸時代の武士の生活をしのばせる調度や武具が展示されている。馬出しなどを見ながら桜並木の堀際を歩くと、水面に精美的な石垣が映える。

篠山城の東には、「河原町妻入商家群（かわらまちつまいりしょうかぐん）」が残されている。篠山築城の際に造られたという白壁の家々は、美しく調和しあっている。夕暮れにともる明かりも工夫されていて、独特の雰囲気を見せてくれる。



明りがともった河原町の商家群



妻入りの商家

妻入とは、切妻造りの建物の、妻の側に入出口があること。したがって間口が狭く、奥行き長い建物が多い。千本格子の窓やうだつ、袖壁（そでかべ）など古い商家の姿は、時代劇の中に入り込んだような錯覚を起こさせてくれる。町並みの中には、丹波古陶館（たんばことうかん）、能楽資料館があり、土産品店、骨董品店も多い。

この河原町の裏山が、焼物で有名な王子山（おうじやま）、東は亀岡（かめおか）を経て京都へ続く街道への出口となる京口である。



雲部車塚

篠山の城下から、亀岡へ抜ける街道を東へ7～8km行った所に、丹波最大の古墳、雲部車塚（くもべくるまづか）がある。全長140mをはかる前方後円墳で、満々と水をたたえた濠（ほり）を巡らせている。篠山のような山間の盆地に、これほどの大古墳が造られたのは、単に篠山盆地の生産力が高かっただけではなく、摂津から丹波を抜けて但馬まで行く道筋にあっていたことも理由のひとつだろう。

現在は陵墓参考地として、調査はおろか立ち入ることも許されていないが、明治29（1896）年に後円部が発掘された際には、石室の中に納められた長持形石棺と甲冑（かっちゅう）などが見つかっている。その際の様子は精密なスケッチに残され、出土品は一部が京都大学に保管されている。

残念なことに、あるいは幸いにも、その際には石棺は開けられていない。したがって何が中に納められているのか、どのような人物が葬られているのかはわからないままである。しかしそのおかげで、おそらく石棺の中身は腐朽劣化を免れ、今も眠っている。間違いなく未来へ引き継がれる遺産になることだろう。

5世紀に造られたこの古墳の謎解きは、とても気になるけれど未来に託すことにして、しばしその威容に打たれてみよう。



雲部車塚



説明板

用語解説

【丹波焼】たんばやき

篠山市今田町周辺で生産された陶器。丹波立杭焼、または立杭焼とも称し、瀬戸、常滑（とこなめ）、信楽（しがらき）、備前、越前とともに日本六古窯の一つに数えられ、その起源は平安時代末にさかのぼる。

丹波焼は、古墳時代から続く須恵器生産の上に、常滑焼など東海系陶器の影響を強く受けて成立したが、室町時代にはその影響から脱して独自性を確立した。近世に入ると施釉陶器（せゆうとうき）の生産が始まり、釉薬や化粧土に独特の技法が用いられたほか、鮮やかな色絵陶器も生産されるようになった。太平洋戦争後は、近代的な工場による陶磁器生産に圧迫されたが、その苦境を乗り越えて現在に至っている。

中世には壺（つぼ）、甕（かめ）、すり鉢などの日用器を主に生産し、この伝統は近世にも引き継がれて徳利など庶民生活に関わる焼物を生産したほか、高級品としての茶器の生産もおこなわれるようになった。1978年「丹波立杭焼」の名称で国の伝統的工芸品指定。

【和田寺】わでんじ

篠山市今田町にある天台宗の寺院。二老山（にろうさん）と号する。今田町のほぼ中央に位置しており、646年に法道仙人が和田寺山頂に建立した堂に始まるとされる。1184年に堂宇をすべて焼失、再建されたが山頂での寺院維持が困難となったため、ふもとに移転して本堂が再建された。1392年より寺号を現在の二老山和田寺とした。

【篠山城】ささやまじょう

篠山市北新町にある近世の平山城。1609年、徳川家康の実子松平康重が家康の命を受けて築城を開始し、15か国20大名を動員して、わずか6か月で完成したという。

全体の平面は方形で、輪郭式（りんかくしき）と梯郭式（ていかくしき）を融合した形式となっている。本丸、二の丸、三の丸は石垣と土塁で囲み、二の丸と三の丸の間には内堀がめぐり、三の丸の外側に外堀がめぐり、北、東、南には馬出（うまだし）が設けられている。天守閣は当初から建設されなかった。

初代城主は松平康重。以後8代にわたって松平氏が藩主をつとめ、その後は青山氏6代が藩主となって明治維新を迎えた。

明治維新後に大書院を除くすべての建物が取り壊され、大書院も1944年に焼失、2000年に復元された。国指定史跡。

【安間家史料館】あんまけしりょうかん

安間家資料館は、天保元（1830）年以降に建てられた武家屋敷で、代々安間家の住宅として使用されてきたものである。安間家は、禄高（ろくだか）12石3人扶持（天保8年ころ）の徒士（かち）であった。住宅は、入母屋造り、茅葺（かやぶ）きで間口6間半×3間半、奥行き4間×2間半の曲屋であり、建築当初の形をよく残している。1994年に篠山市の指定文化財となり、内部には安間家に残された古文書や日常に用いられた食器類や家具を始め、その後寄贈を受けた篠山藩ゆかりの武具や資料を中心に展示している。

【うだつ】うだつ

民家で、妻の壁面を屋根より高く造った部分。また、建物の外側に張り出して設けた防火用の袖壁（そでかべ）。

【袖壁】そでかべ

建物から外部へ突出させる幅の狭い壁。目隠し・防火・防音などのために用いられる。

【王子山焼】おうじやまやき

文政元（1818）年から、明治2（1869）年まで、篠山市王子山で焼かれた陶磁器。篠山焼とも呼ばれる。当初は篠山藩主青山忠裕により始められた「お庭焼」であったが、後には地元の商人が運営を引き継いだ。

主に磁器を生産し、青磁、染付、白磁などが焼かれている。製品には花器、鉢、文房具、水差し、徳利、皿、置物などがある。

文政11（1928）年に、欽古堂亀祐（きんこどうかめすけ）を招いて指導を受け、亀祐自身の作品も残された。

【雲部車塚古墳】くもべくるまづかこふん

篠山市東本庄にある古墳時代中期の前方後円墳。全長142mをはかり、盾形の周濠（しゅうごう）をめぐる。明治29（1896）年に、当時の雲部村の人々によって後円部の石室が発掘され、その内容が精密に記録された。それによれば、石室は割石積みの竪穴式（たてあなしき）石室で、長さ5.2m、幅1.5m、高さ1.5mとされている。石室内には長持形石棺が置かれており、周囲の壁に設けられたL字形金具に掛けられたような状況で、槍や刀剣類が副葬されていたという。

この際には石棺の蓋（ふた）は開けられなかったが、石室内の副葬品として、刀34本、剣8本、鉾（ほこ）2本、鎧（よろい）鉢4点、鎧胴5点、鍬（やじり）107点が記録された。その一部は、現在京都大学に保管されている。

雲部車塚は、畿内から但馬、丹後へ抜ける交通の要衝に位置する大規模な前方後円墳であり、畿内政権と深い関係をもつ王の墓と考えられる。その後陵墓参考地に指定され、現在は宮内庁の管理下に置かれているため、新たな調査はおこなえない状況であるが、1896年の記録によって大型前方後円墳の埋葬状況を知ることができる、極めて重要な古墳である。

【長持形石棺】ながもちがたせっかん

古墳時代中期に盛行した石棺。底石の上に側石と小口石をはめ込み、かまぼこ形の蓋（ふた）をのせる。蓋石の各辺や側石の両端に1～2個の突起（縄かけ突起）を作り出す。加古川下流の竜山（たつやま）に産する石材で作られた例が多く、近畿地方中央部の大型古墳の埋葬施設に使用されているため、「王者の石棺」とされる。

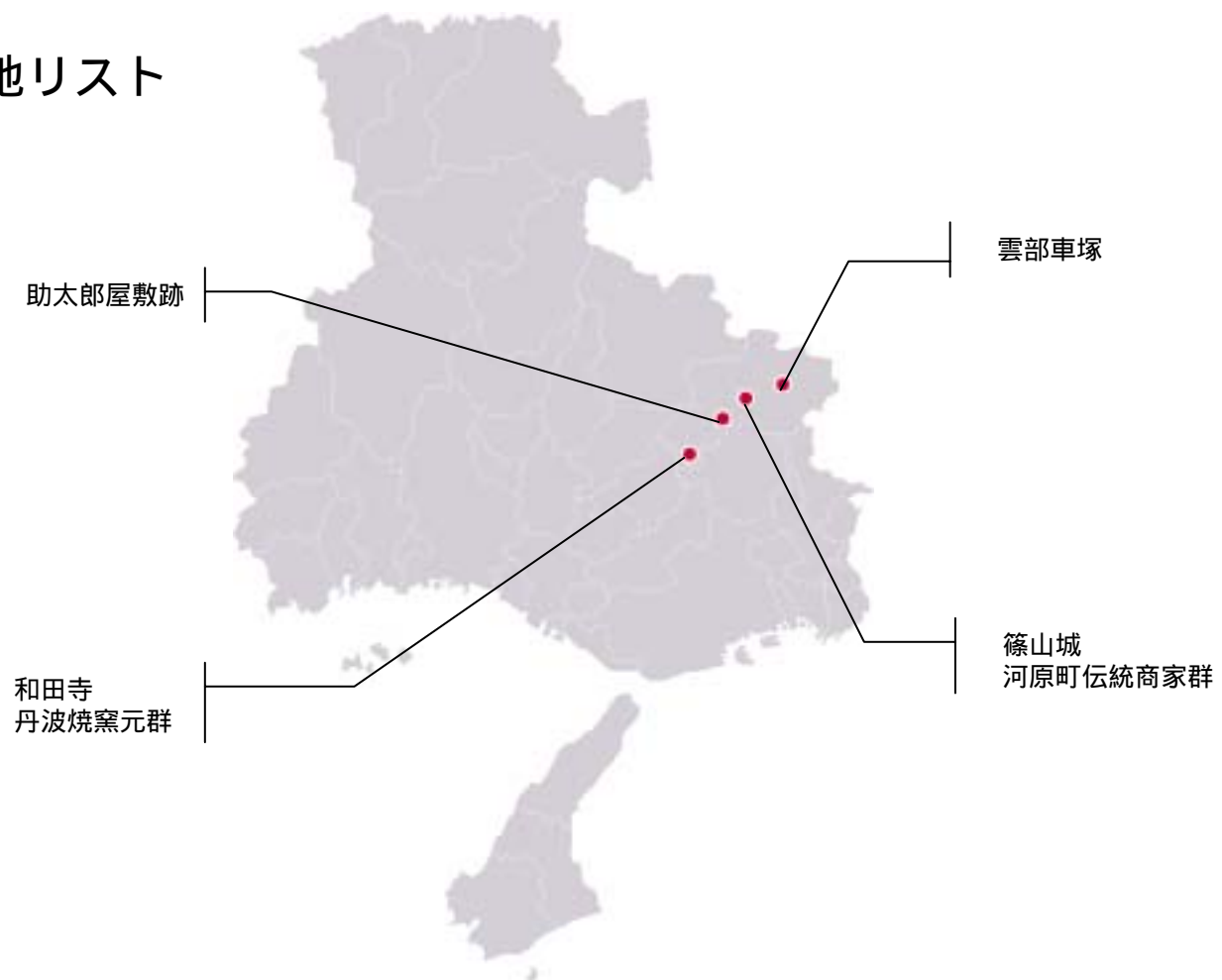
【陵墓・陵墓参考地】りょうぼ・りょうぼさんこうち

一般に、天皇・皇族の墓を総称して陵墓といい、皇族の墓所である可能性がある場所を陵墓参考地と呼ぶ。陵墓および陵墓参考地は宮内庁によって管理されており、研究者などが自由に立ち入って調査することができない。一部の古墳では、比定される天皇と古墳の年代に明らかな相違が見られ、当該天皇陵であることに疑義が出されている。考古学的には、古墳の名称はその古墳が所在する地名（字名など）を用いることが原則であり、天皇陵という呼称は用いない（例：仁徳天皇陵＝大仙（だいせん）古墳、応神天皇陵＝誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳など）が、「仁徳天皇陵古墳」といった用い方をする例もある。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	丹波のむかしばなし第3集	2000	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡2 兵庫北部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	やきもののふるさと丹波	2005	兵庫陶芸美術館編	兵庫陶芸美術館

所在地リスト



助太郎屋敷跡	篠山市真南条下928 付近
和田寺	兵庫県篠山市今田町下小野原69
丹波焼窯元群	兵庫県篠山市今田町上立杭周辺
篠山城	篠山市北新町1-1ほか
河原町伝統商家群	篠山市河原町周辺
雲部車塚	篠山市東本荘 東

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日